

「山月記」雑談

岩 田 一 男

最近、中島敦の「山月記」をめぐって、私に二つハプニングがあった。一つは、「山月記」制作の年代に関するもの、他の一つは、この作品の重要なキーポイントというべき「臆病な自尊心」という言葉の出所に関するものである。その次第を、雑談的に記そうと思う。所詮、雑談である。おそらく思い出話的脱線を重ねるであろうことをお断りしておく。お断りついでにもう一つ。出すまいとしても私という言葉が顔を出すことになるだろうが、これも思い出話的雑談という形式のしからしめるところであって、他意はない。

「山月記」の制作年代

「山月記」がいつ書かれたか、正確なことはわかっていない。最近、中島敦の昔の教え子たち十名近くが集まった席上、この作品を中島が教室で彼女らに読んできかせた、と異口同音に言いだした。年譜の示すように、中島が東大の国文科を卒業して横浜の女学校の教師になったのは昭和8年（1933年）4月である。その教え子たちも同じ時に1年に入学して、国語（と、組によっては英語も）を教わっている。当時この学校では、3年になるとき組の編成替えをする習慣であったから、彼女らが、揃って聞いたとすれば、1、2年のころということになる。そしてどうやら彼女らが2年生のとき、すなわち、昭和9年だったろうというのが大部分の意見であった。それらの人びとには悪いが、「山月記」が昭和9年に書かれたということを私は信じていない。しかし念のため、ということもあって、他の中島の教え子だった人たちや同僚だった人たちに尋ねてみるほか、先の名十名近くの人たちにもう一度個別的に尋ねたりした。そして、昔の中島先生は今では文学史的存在なのであるから、新しい事実が発見され

るのは結構なことだし、また皆さんの義務でもある、しかしそのためには、何よりも正確でなければならない、というようなことを言い添えた。それがかえってその人たちを、慎重にさせてしまったのか、確かに「山月記」であった、と固執する者はほとんどなくなった。

ただ、ここで明らかになったことは、中島が生徒に作品を読んできかせたことがある、という事実である。(漱石の「坊ちゃん」を読んでやっていることは聞いていたが)はたして理解できるかどうかともわからない小さい女学生に自分の作品を読んでいる中島を想像すると、孤独の影がさしはじめたことを感じるのである。昭和8、9年に彼の身近くの友人といえ、あるいは私ぐらいではなかったろうか。私には作家志望であることをかくさなかった彼は、「批評はさせない」と前置きして読んできかせるのであった。読んできかせるといえ、だれも知らない事実を一つ書いておく。昭和8年4、5月ごろ、と思うが、読売新聞(?)に応募する東京風景か何かの歌詞であった。(今にして思う、それは生活の必要からであった。)小型の原稿用紙に、銀座とか、神田とか、両国とかの風物の特徴を巧みに盛り込んだものであった。白秋、李太郎、荷風、潤一郎の世界だなと思った。もったいないくらい芸術的に美しすぎるどころが、もしかしたら選に洩れる原因になりはしないか、とふと思ったが、結果は、私の杞憂のようになった。あの原稿は私が貰っておくべきであった。今思っても足の裏がかゆくなる。もちろん、地球上に残ってはいるまい。「もう流行歌は止めたよ」と中島は言った。作品がなくては話にならないが、ずっと後になって、中島の卒業論文「耽美派の研究」を読み、あの歌詞は、そこで扱った世界だったことに気がついた。

こういうふうにして「プールの傍で」だの、「虎狩」だの、「斗南先生」だの、「北方行」の初めの方の一部らしいものなどを聞かされた。(10年ごろからは、もう読んで聞かせることはなく、作品の構想や内容の一部などの話になった。)ところで、ここで私が言いたいのは、私には「山月記」は読んで聞かされた記憶(事実)がないという事実である。理由は簡単である。昭和9年には、書かれていなかったからである。そうして彼女らが読んでもらった作品がもしありとすれば、「虎狩」であったに違いない。

「山月記」が昭和9年に書かれたものかどうかを判定するには、何よりも作品そのものに聞くのがいちばんよい。それには「山月記」と「虎狩」(これが昭和9年に書かれたことは間違いない)とをくらべてみればはっきりする。だから、「虎狩」について述べようと思うのだが、しかしその前に中島夫人のことばに触れる必要がある。

「(南洋から)帰ってから、ある日、今迄自分の作品の事など一度も申したことが

ありませんのに、台所まで来て、「人間が虎になった話を書いたよ。」と申しました。その時の顔は何か切なそうで、今も忘れることが出来ません。あとで「山月記」を読んで、まるで中島の声が聞える様で、悲しく思いました。」（文治堂版全集付録ツシタラ4「お礼にかへて」）。

年譜によると、「昭和17年（1942）34歳（今日風に数えれば33歳）3月17日南洋より出張にて帰京」とあるから、夫人のことばによれば、17年3月17日以後ということになる。ところが、すでに17年の文学界2月号に「古譚」と題して「山月記」と「文字禍」が掲載されているのであるから、制作されたのは、昭和9年ではないが17年3月より以後でもないということになり、夫人の言葉にも時間的に疑問が起こる。

深田久弥氏の角川文庫「光と風と夢」の解説によると、昭和16年6月中島が「病気のため、及び、生活のため」南洋へ行く前、留守宅を訪問して部厚な原稿1篇を預けて行った。その以前に別の原稿を預けてあった。深田氏は半年ほど忘れていたが、ある夜半にふと思いで出して、前の分を取り出して読み感心した。それが先に預けた古譚六篇で、その中に「山月記」もあった。感心した氏は全部を文学界に推薦、なお全部が掲載不可能の場合のために順位をつけたが、「文字禍」を第一席においたらしい。けっきょく「山月記」と「文字禍」の二篇が掲載され、好評だったと書いている。

出発前に、彼が預けた部厚な原稿というのが彼の長篇「光と風と夢」であることは明らかである。したがって16年6月以前に書かれた「光と風と夢」よりも前に「古譚」6篇が書かれていたことになる。なお中島がその折（16年6月）深田氏宛に残した走り書き（名刺）に「『西遊記』（孫悟空や八戒の出てくる）を始めていますが、一向にはかどりません。」とある。それが6月の何日かわからないが、南洋へは6月28日に出帆しているから、「西遊記」の完成は昭和16年6月28日以前ということになる。とにかく、「古譚」（「山月記」を含む）、「光と風と夢」、「西遊記」という順になる。文治堂版全集年譜の「山月記」の推定年代「16年4月？」というのが、だいたいにおいて正しいかもしれない。

こう言ってしまうと、後は何も言うことはないようなものだが、「虎狩」と「山月記」とをくらべてみることで、7年ほどの隔たりによる違いが、なおはっきりすると思う。

「虎狩」から「山月記」に至るまでには、深田氏のいわゆる地下室の作業「過去帖」（「かめれおん日記」、「狼疾記」）などの時期を通過しなければならなかった。

「虎 狩」

重要な作品は最後の2年間に書かれたから、全集の分類は成長過程によるよりも、作品系列による旨、筑摩版全集の編者は言っている。もっともだと思う。しかし、同時に、成長過程をたどることが不可能でもないし、また意味がないこととも思わない。筑摩版全集にどういうわけか欠けている「虎狩」を考え合せてみると、これが一つの分水界になるだけに、成長過程ということを考えたいのである。

たとえば昭和9年の「虎狩」、昭和11年末の「過去帖」、昭和16年5月頃の「光と風と夢」、昭和17年3月南洋から帰ってからの「弟子」「李陵」など、それぞれかなりはっきり時期が区別できるのではなからうか。「虎狩」の特徴をみると、第一に、明るさがある。登山、水泳を楽しむほどの健康をもち、生活的にもやや落ち着いた、一つの比較的明るい時期を示すもので、のびやかな文章に苦渋の影はない。「私は虎狩の話をしたと思う。虎狩といってもタラスコンの英雄タルタラン氏の獅子狩のようなふざけたものではない。正真正銘の虎狩だ。」という書出しの示すように、後年のものとは異なった明るさがある。アルフォンス・ドーデーの「月曜物語」だの、モーパッサンの短篇の気のきいた落ち（二人の釣糸をたれていた男が死んで魚籃の中の魚だけ残ったという結びなど喜んでいた）だのを楽しがっていたころの産物である。

第二に、作品の取材や発想の仕方も、後年のものと異なっている。のどかな土曜の午後の同僚たちの閑談にヒントを得ている。京城の「郊外の夜中の独り歩きはまだ危険な頃だった。次のような話さへある。」として、交番へ二匹の虎がやってきて巡査を驚かし、一時間ばかり肝をつぶさせてから行ってしまったという話は、同僚の京城にいたことがある平野宣紀氏が語ったところを利用。もう一つは私が子供の時丹沢山へ熊狩に行く父とその中国人の友人の後について、秦野の農家に一泊、夜一度眼を覚まして二人が眠っているのを確認、安心して一眠りし、夜明けにうそ寒いので眼を覚ましたら、二人の寝床はもぬけのからだったという話からもヒントを得ている。当時はまだ珍しかった熱帯魚に関する部分も私がつれて行って見せたのである。

つまり「虎狩」は、後年の「光と風と夢」「弟子」「李陵」などと発想のしかたが違っている。この点は注目し値する。それら後年の作品は、いずれも依拠する古典があり、それを下敷にすることで、かえって彼らしいものがはっきり出ている。「山月記」などその典型的なものである。こういう点からも昭和9年のものではないといえる。李景亮の「人虎伝」をほとんどそのまま使いながら、しかも人を食った虎の話と詩人

の運命との本質的な違いである。どうやら、この方が中島には、より適した形式であった（あるいは、に成った）ようである。

中島の作品の中で、この「虎狩」のことを問題にする人が少ないのは、いささか不思議であるし、残念でもある。中島自身（当時は）この作品が好きであったし、「中央公論」の新人号に応募したところをみても自信のある作品であったろう。ただし当選せず（枚数が多いということもあったかもしれない）、選外佳作となった。当選作の島木健作「盲目」、丹羽文雄「贅肉」はじつは、あらかじめ決まっていたと仄聞する。他の選外佳作の中にも当時すでに同人雑誌などで注目されていたつかしい名前が多い。また雑誌のどこを見ても選者の批評も選考の経過も載っていない。昭和9年7月7日付友人宛の手紙には「虎狩、又してもだめなり。但し何とか佳作と称するところに、はいつている。なまじつかそんなところに出ない方がよかつたのに。すこしいやになる。」とある。してみると、ほかにも出してみたことがあったのであろう。

惜しかったね、と言うと、「丹羽という人、おれより巧いのだから、仕方がないよ」ときわめてさっぱりしたものであった。（島木健作については何も言わなかった。）そうして丸善から丹羽文雄の作品集「鮎」を借りて読んでいた。「山月記」がこの「虎狩」と同じ年に書かれたとは、題材的にも、手法的にも信じるわけにはいかない。

「虎狩」に続く時期

さて、中島は、一年在籍し、「森鷗外の研究」など評判がよかった大学院を昭和9年3月にやめている。その直後、「教師もダメ、学者もやはりダメ、と消して行くと、作家が残る。」と消極的な言い方ではあったが、はっきりと作家として立つ決意を（前からわかっていたことであったが）語った。したがって、選に洩れたということは、その時にはわからなかったが、あるいは見せなかったが、かなり大きなショックであったことが、今にして思い当たる。（そうして、年譜によれば、「9月には喘息発作のため生命危ぶまれる」ほどであった。）こうして少しずつ健康も衰え、欠勤がちの時期に入ってゆく。それが、深田氏の「地下室の作業」と呼ぶ「過去帖」二篇に代表される時期である。一日中自分の身体を解剖図のように想像したり、長らく忘れていた「存在に対する疑惑」が頭を上げたりしている。それと同時に、果てしない自己解析、自己苛責が始まる。

辞書をくっていて偶々 opera という語に出あった途端、しばらく忘れていたはなやかな光景がぱっと今の暗い生活と対照するように浮かんだり、トマス・ムアの「ラ

イト・オブ・アザ・デイズ」を訳したりする。

しづかなる夜は なかなか
ねなましものを たまゆらの
過ぎ去りし日の ものおもひ
たのしきひかり はこびくる（後略）

訳の巧拙は今問わない。このような訳詩を、ありのすさびに、というよりは、喘息の発作の合間に、書きつけていた中島を思うと、切ないのである。

そうして、この「どうしようもない形而上学的思弁の泥沼」から、いつか「わが西遊記」の悟浄のように、脱皮するともなく脱皮するまで、苦しむことになる。そういう後に、「山月記」は書かれたのである。

「雨月物語」

ここで話をかえて、彼が好んだ怪異譚「雨月物語」に触れておく。前述の卒業論文「耽美派の研究」（昭和7年11月完成）「三」の「国文学史に現れた耽美派的傾向」の中で、江戸時代の部では西鶴や近松は数行で片付けてしまっているのに上田秋成（と南北）をひじょうに高く買っており、「雨月物語」にはかなりのスペースを割いて論じている。「山月記」に影響があるなどと軽々しくいうつもりはない。しかし中島の当時の怪異譚の好みと、短篇小説の考え方がわかれると思うので、少し長いですが、上田秋成に関する部分を次に掲げておく。

「「雨月物語」は此の種の物語中で最も芸術的に高く買はれて然るべきものである。その怪異的、神秘的な題材は主として剪燈新話その他の支那の怪談からとつたものであつて翻案といつて了へば、それまでであるけれども、秋成がかかる題材を扱んだといふ、その狙ひ所を考へると、そこに耽美派の一面としての神秘的傾向や怪奇趣味がうかがはれる。殊にその表現が芸術的に成功して居て、所々ボオの物した恐ろしい短篇を思はせるものがある。」

この、翻案かもしれないが、といいながら、秋成がその題材を扱んだ狙いを問題にしているところは注目に値する。

「時に峯谷ゆすり動きて、風叢林を僵すが如く、沙石を空に巻き上る。見る見る一段の陰火君が膝の下より燃え上りて、山も谷も昼のごとくあきらかなり。光の中につらつら御気色を見たてまつるに、朱をそそぎたる竜顔に、荆の髪、膝にかかるまで乱れ、白眼を吊りあげ、熱きいきをくるしげにつかせ給ふ。御衣は柿色のいたうすすびたるに、手足の爪は獣のごとく生ひのびて、さながら魔王の形あさましくもおそろし。空に向ひて相模々と叫ばせ給ふ。あ、と答へて、鳶の如く化鳥の翔けきたり、前に伏して詔を待つ。

の凄壮味や、「蛇性の姪」の妖艶な恐怖、「仏法僧」の幻想がそれで、ことに「青頭巾」は短編としての構成もよく、夢幻的な怪奇恐怖の表現としてすぐれて居り、美しい稚児を失つた僧が

懐の壁を奪はれ挿頭の花を嵐に誘はれしおもひ、泣くに涙なく、叫ぶに声なく、あまりに歎かせ給ふままに、火に焼き土に葬ることをもせで、臉に臉をもたせ、手に手を取りくみて、日を経給ふが、終に心神みだれ、生きてありし日に違はず戯れつつも、其の肉の腐り爛るを吝みて、肉を吸ひ骨を嘗めて、はた喫ひつくしぬ。寺中の人々院主こそ鬼になり給ひつれと、あはただしく逃げさりぬるのちは、夜々里に下りて人を驚ろかし、或は墓を発きて、腥々しき屍を喫ふさま……

も恐ろしく、その僧が泊つた快庵禪師を夜中に喰はうとして

子^おひとつとも思ふころ、あるじの僧眠藏を出でてあはただしく物をたづね。たづね得ずして大いに叫び、禿顚いづくに隠れけん。ここもとにこそありつれと、禪師が前を幾たび走り過ぐれども、更に禪師を見ることなし。堂の方に駈りゆくかと見れば、庭をめぐりて躍りくるひ、遂に疲れふして起き来らず。

も物凄しいし、さてそれから一年たつて再び禪師がその寺へ行くと、

かの僧の^き座らしめたる簀子のほとりをもとむるに、影のやうなる人の僧俗ともわからぬまでに髭髪もみだれしに、葎むすばほれ尾花おしなみたる中に、蚊の鳴くばかりなるほそき音して、物とも聞えぬ様に、まれまれ唱ふるを聞けば

江月照松風吹。永夜清宵何所為。

禪師見給ひてやがて禪杖を拿りなほし^{そもさん}作麼生何の所為ぞと、一喝して他^{かれ}が頭を撃ち給へば、忽ち氷の朝日にあふがごとく消えうせて、かの青頭巾と骨のみぞ、草葉にとどまりける。

という話の結末もよく利いて居る。この「青頭巾」の外、「浅茅が宿」の哀愁も、「夢窓の鯉魚」の軽い味も、みなとりどりに面白い。」

上の中島の「兩月物語」の評をもじって「山月記」にあてはめ、「題材は支那の怪異譚「人虎伝」からとったものであって、翻案といってしまうとそれまでであるけれども、中島がかかる題材を選んだという、その狙い所を考えると、そこに（ここだけは、「人間存在の悲しみが切々と感じられる」とでも書くべきか）殊にその表現が芸術的に成功して居る」と、ほぼ同じことが言えると思う。

「狐になった奥さん」

カフカに興味をもったことについては、すでに多く言われているから触れず、ここに、ディヴィッド・ガーネットの作品に興味をもったことに触れておきたい。

筑摩版全集の年譜によると昭和8年5月（1933）25歳の個所に「教職の余暇英文学及び中国文学を研究する」とある。これは誤解を招かないだろうか。

中島は、いろいろな意味で芥川龍之介と似ているといわれるが、「読書力の旺盛な」（「狼疾記」の中で自ら認めている）点でも似ている。彼もまた古今に通じ和漢洋にわたるさまざまなものを猛烈なスピードで読み上げ、しかもその特質を的確に把握する男であった。

内的な欲求のおもむくままに読んでいった跡をふりかえって見れば中島らしい軌跡が見られるのであろうが、毎日顔を合わせているものにとっては昭和8、9、10年頃には、激しい知的欲求とも、狂気（中村光夫）とも見えた。

だから、とくに英文学（中国文学はさておき）だけを読んだかどうか疑問だし、また教職の余暇研究というと何やら学問的な体系的の研究を感じさせるが、そういう読み方でもなかった。後の文治堂版の年譜にこの項が消えているのは、私がそういう意味の感想を述べたためであるらしい。それが誤っているとは思わないが、今になって考えてみると、その頃英文学作品を割合に多く読んでいたということは、言えるかもしれない。そうして、その多くが廿世紀英文学のものであった。ことによったら、これは（言いにくいだが）、当時現代英文学を読んでいた私から、（影響などとは夢にも言うつもりはないが）多少、何というか、触発されるくらいのことはあったかもしれない。オルダス・ハックスレー、D・H・ローレンス、ディヴィッド・ガーネットの3人は

とくに注目に値するが、ここではガーネットだけに触れる。

ディヴィッド・ガーネット（1892— ）の家庭も、文人一家で、祖父のリチャードは大英博物館の図書部長や文芸家協会の会長をやったり、ミルトン、カーライル、エマスンなどの伝記や、イタリア文学史、シェイクスピアの研究や、「神とのたそがれ」などの著書がある。その次男でディヴィッドの父に当たるエドワードも文学者で、劇を書き、またコンラッドの書翰の編さんなどをしている。その妻、つまりディヴィッドの母コンスタンスはロシア小説の翻訳家として有名で、日本で愛読されたツルゲーネフ、チェーホフ、ゴーゴリ、ドストエフスキーなどロシア文学の英訳は、多くこのコンスタンス・ガーネットの仕事である。こういう文学的な高級インテリの家庭環境の中で成長したディヴィッドは、初め植物学を学んだが、やがては文学に身を投じる運命にあった。（これらの点でオルダス・ハックスレーに似ている。）

文学のようなふうてんなものと交渉をもってはならぬ、と父親はかねがね息子に言っていたようであるが、ガーネットはやはり蛙の子は蛙で、1922年に「狐になった奥さん」を書き（これはホーソンデン文学賞をもたらし）、1924年には「動物園に入った男」を書いた。以後「船乗り亭」（1925）、「彼の女は行かねばならぬ」（1927）、「愛なき人」（1929）、「いなごの襲来」（1931）、「臆病者の飛行機演習」（1932）、「ボカホントス」（1933）、「やぶにらみ」（1935）などを書いた。どれも、全くありえない状況を設定しながら、その中で行動をきわめてありうるように書くところに特徴がある。

中島が読んだのは最初の二つだから、あるいは研究社の現代英文学叢書のものであったかもしれない。恋人とけんかして腹立ちまぎれに「動物園に入った男」の檻にホモ・サビエンスというふだがつけてあるところなど、おもしろいな、と二人で笑いあった。

「狐になった奥さん」は、処女作にすべてがあるという意味で、もっともガーネット的な作品である。1880年のはじめ、新婚間もないテブリック夫妻が近くの雑木林を散歩していると、まったく突然妻のシルヴィアが一匹の狐に変わってしまう、というところから物語は始まる。夫は狐になった妻を、犬から、世間から必死に守り、あくまで愛しぬこうとする。それにもかかわらず、妻の中の人間は少しずつ失われてゆき、やがては肉体ばかりか心まで狐になってゆく。そうしてけっきょく犬にかまれて死んでしまう。……と、こう言えば、「山月記」との類似に気がつく人もあろう。ただこれは怪異譚ではなく、フランス的な、しゃれた近代的なお伽噺のようなもので、夫の苦悩などむしろヒューモラスに感じられる。（しかし、一皮むけば愛情の継絶、愛し得

ざる現代人の悲しみである。) この、人間がとつぜん獣になったという点、人間の要素がだんだん減って獣の要素がだんだん濃くなってゆく点は「山月記」に似ている。

こうは言っても、この作品が「山月記」に影響があるなどと、軽々しく言うつもりは毛頭ない。いや、「山月記」には、李景亮の「人虎伝」という典拠が存在するのである。それで、これから「山月記」と「人虎伝」とを比較対照しながら、雑談を進めてゆくことにする。

「山月記」と「人虎伝」

まず、主人公李徴がいかにして虎になったかという書き出しの部分に対照してみよう。左が「山月記」、右が「人虎伝」である。

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南慰に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に歸臥し、人と交を絶て、ひたすら詩作に耽った。下吏となて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家として名を死後百年に遺さうとしたのである。しかし文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃から其の容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登弟した頃の豊頬の美少年の倂は、何処に求めようもない。数年の後、食窮に堪へず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、之は、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての

隴西李徴、皇族子。家於號略。徴少博学、善属文。弱冠従州府貢焉。時号名士。天宝十五載春、於尚書右丞揚某榜下登弟進士 後数年調選、補江南尉。徴性疎逸、恃方倨傲、不能屈跡卑僚。嘗鬱鬱不樂。每同舍会既酣、顧謂其羣官曰、「生乃与君等為伍邪。」其僚友咸側目之。及謝秩則退歸間適。不通人歳余近、後迫衣食且欠、乃東遊吳楚間、以于於郡国長吏。吳楚人聞其声固久矣。及至、皆開館以俟之。留宴遊極歡。将去、悉厚賄以实其囊橐。徴在吳楚且周歳、所獲饋遺甚多。西歸號略。未至。舍於汝墳逆旅中、忽被疾発狂。鞭捶僕者、不勝其苦。如是旬余、疾益甚、無何。夜狂走、莫知其適。家僮跡其去、而伺之、尽一月而徴竟、不回。於是僕者馭其乘馬、挈其雜橐而遠遁去。

同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかった其の連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の偽才李徴の自尊心を如何に傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々として樂しまず、狂悖の性は愈々抑へ難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿った時、遂に発狂した。或夜半、急に顔色を変へて寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつ其の儘下にとび下りて、闇の中へ駈出した。彼は二度と戻って来なかった。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

「人虎伝」の「楚人其声を聞くこと固より久し。……獲る所の饋遺甚だ多し」までは、どうでもいいことで当然「山月記」では省略している。また「人虎伝」のここまでのところでは李徴に妻子があることは書かれていない。独身者のような感じにもなる。しかし、「詩家として名を死後百年に遺そうとしな」がら「文名は容易に揚らず」「己れの詩業にも半ば絶望し」（「過去帖」の中できり返し引用している「願望はあれど希望なく」というダンテの言葉を思い出させる）、「容貌も峭刻となり」「妻子の衣食のため」一地方官吏となり、昔、輕蔑した連中の下命を拝さねばならず、自尊心を傷つけられ、狂悖の性は抑え難くなったことを書き加えている。李徴は次の詩の作者に酷似してはいないか。

五月五日自哂戲作

行年三十一 狂生迎誕辰
木強嗤世事 狷介不交人
種花窮措大 書蠹病瘦身
不識天公意 何時免赤貧

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊った夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでゐる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駈けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走ってゐた。何か身体中に力が充ち満ちたやうな感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた。気が付くと、手先や脇のあたりに毛を生じてゐるらしい。少し明るくなってから谷川に臨んで姿を映して見ると、既に、虎になってゐた。自分は初め眼を信じなかった。次に、之は夢に違ひないと考えた。夢の中で、之は夢だぞと知ってゐるやうな夢を、自分はそれ迄に見たことがあったから。どうしても夢でないと思へばならなかつた時、自分は茫然とした。さうして、懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想うた。しかし、其の時、眼の前を一匹の兎が駈け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目覚ま

虎曰、「我前身、客吳楚、去歳方還、道次汝墳。忽嬰疾癡狂。夜聞戸外有呼吾名者。遂応声而出。走山谷間、不覚以左右手攫地而歩。自是覺心愈狠、力愈倍。及視其肱髀、則有班毛生焉。心甚異之。既而臨溪昭影、已成虎矣。悲慟良久。然尚不忍攫生物食也。既久。饒不可忍。遂取山中鹿豕獐兔充食。又久、諸獸皆遠避、無所得。饑益甚。一日有婦人從山下過。時正餒迫。徘徊數四、不能自禁、遂取而食。殊覺甘美。今其首飾猶在巖石之下也。自是見冕而乘、徒而行者、負而趨者、翼而翔者、毳而馳者、力之所及、悉擒而阻之立尽。率以為常。

した時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばってゐた。之が虎としての最初の経験であった。それ以来今迄にどんな所業をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。

汝水のほとりに一泊した晩、自分の名を呼ぶ声がするので、それを追って行くうち、身が軽く力が満ちてきたように感じられ、谷川に姿を映してみると虎になっていた、というところまでは、「山月記」は「人虎伝」と同じである。

しかし次の「自分は初め眼を信じなかった。」から夢の中で夢を見ているような気がしたが夢ではなかったこと。「押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめなのだ」というところは「人虎伝」にはない。近代小説的な中島の付け足し、「かめれおん日記」や「狼疾記」（昭和11年）に見られる「存在への疑い」「人間の運命への恐れ」である。その反面、死のうと思ったが兎が前をよぎるのを見ると「自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目覚めた時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばっていた。」とあって空腹だったから食ったというようには書いてない。「食った」という言葉など使っていない。自分の中の形骸だけでなく人間まで虎になってしまった驚きと悲しみとを書いている。そうして、それが虎になった最初の経験で、「それ以来今迄にどんな所業をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。」としている。どんなものを、どのようにして食べたか、などとは書いていない。ところが「人虎伝」では、なるほど初めに「生物を攫みて食うに忍び」なかったが「久しく飢えて」いて我慢ができず、「遂に山中の鹿豕獐兔を取りて食に充つ」と意識的である。そのうち動物どもが怖れをなして近づかなくなったので、また飢えた。それで、人間を見かけると、「徘徊すること数四、自ら禁ずる能わず」で、食うまいとする努力はあるが「遂に取りて食う。殊に甘美なるを覚ゆ」と人食い虎出現の次第になってくる。「山月記」は筆を省いて語らない。「人虎伝」は人食い虎となるに到ったプロセスを書いている。このあたりも「山月記」が「人虎伝」と扱いの違っている点である。

ただ、一日の中に必ず数時間は、人間 非不念妻孥思朋友。直以行負神祇、一旦
の心が還つて来る。さういふ時には、曾 化為異獸、有覲於人。故分不見矣。嗟
ての日と同じく、人語も操れれば複雑な 夫、我与君同年登第、交契素厚。君今日
思考にも堪へ得るし、経書の章句を誦ん 執天憲、耀親友。而我匿身林藪、永謝人

ずることも出来る。その人間の心で虎としての己の残虐な行のあとを見、己の運命をふりかへる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい。しかし、その人間にかへる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。今迄は、どうして虎などになったかと怪しんでゐたのに、此の間ひょいと気が付いて見たら、己はどうして以前、人間だったのかと考へてゐた。之は恐ろしいことだ。今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えて了ふだろう。恰度、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するやうに。さうすれば、しまひに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂ひ廻り、今日の様途で君と出会つても故人と認めることなく、君を裂き喰うて何の悔も感じないだらう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだらう。初めはそれを憶えてゐたが、次第に忘れて了ひ、初めから今の形のものであったと思ひ込んでゐるのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあはせになれるだらう。だのに、己の中の人間は、その事を、此の上なく恐しく感じてゐるのだ。ああ、全くどんなに、恐しく、哀しく、切なく思つてゐるだらう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。己と同じ身の上に成つた者でなければ。所で、さうだ。

世。躍而呼天，俛而泣地。身毀不用。是果命乎。」因呼吟咨嗟，殆不自勝，遂泣。慘且問曰，「君今既為異類。何尚能人言邪。」虎曰，「我今形變而心甚悟耳。」

己がすっかり人間でなくなって了ふ前に、一つ頼んで置き度いことがある。

「山月記」は、ここで人間が失われてゆく過程を、恐れつつ、悲しみつつ、書いている。(この点、「狐になった奥さん」がだんだん人間を喪失してゆく過程を書いているのに似ている。)「虎としての己の残虐な行いのあとを見」というだけで、具体的に残虐な行為を描いてはいない。ところが「人虎伝」には、「我れ形変じて心悟むるのみ。」という以外には、人間が失われて行く悲しみなど何も書いてない。煩に耐えないから原文を写すのを省いたが、ただ二人の問答の形で「空腹ならば私の馬を贈ろう。」「友の乗物を食べるのは友を傷つけることになる。」「では食糧の羊肉を贈ろうか。」「それなら頂こう」というようなどうでもいいやりとりがあった末、妻子はまだ自分が虎になったことは知らない。君が帰ったら、ただ私は死んだと言ってほしい。妻子を路頭に飢死させたくないが、よろしく頼む、といい、すっかり虎となってしまう前に頼んでおきたいことがある、といって、かつて作った詩の中から数十を伝録させるところは、両方ともまず同じ。その詩のことを

長短およそ三十篇。格調高雅、意趣卓　　近二十章。文甚高、理甚遠。閱而歎者
逸、一読して作者の才の非凡を思はせる　　至於再三。
ものばかりである。しかし、哀憐は感嘆
しながらも漠然と次のやうに感じてゐ
た。なるほど、作者の素質が第一流に属
するものであることは疑ひない。しか
し、この儘では、第一流の作品となるの
にはどこか（非常に微妙な点に於て）欠
けるところがあるのではないか、と。

「しかし……」以下は作者のつけたしである。素質は一流だが、「非常に微妙な点」が一流たることを阻んでいるという。それがどういう点なのか作者は書いていない。それは非人間的な点なのであろうか。すぐ次に続く文脈から、芸術至上主義的で尊大な点を言うのであろうか。

そうしてお笑い草に、といって、今の思いを表わす即席の詩を作る。この詩は同じである。

次に虎になった原因について、「山月記」と「人虎伝」は全く異なる。

何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし考へやうに依れば、思ひ当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だと言った。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。勿論、曾ての郷党の鬼才といはれた自分に、自尊心が無かったとは云はない。しかしそれは臆病な自尊心とでもいふべきものであった。己は詩によって名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。

己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨かうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかった。己は次第に世を離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。

若反求其所自恨、則吾亦有之矣。不知定因此乎。吾遇故人、則無所自匿也。吾常記之。於南陽効外、嘗私一孀婦。其家竊知之、常有害我心。孀婦由是不得両合。吾因乘風縱火一家数人、尽焚殺之而去。此為恨爾。

虎になった原因は「人虎伝」では、ある寡婦と通じたのを家人に発見され、逢瀬を阻まれたので、怒って風を幸い放火して、一家を焼殺した罪の報いとしてある。「山月記」は「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」とを飼ひふとらせた結果であるとしている。

ここがたいへんな違いである。「人虎伝」は要するに虎になった男の怪異譚であるが、「山月記」には詩人の悲しみが貫いている。

これから「人虎伝」では、すぐ「虎曰「使回日幸取道他郡、無再遊此途。……」」となっているが、「山月記」では「そうして、付け加えて言うことに、哀慘が嶺南からの帰途にはけっしてこの途を通らないでほしい。」が書かれるまでには、250字ほど、「山月記」を「人虎伝」と決定的に区別する部分がある。左右に対照させて書き続けるとすれば、左の「人虎伝」の部分は全く空白になるだけである。「(この虎が)己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、はては、己の外形をかくのごとく、内心にふさはしいものに変えて了ったのだ。今思へば、まったく、己は、己の有ってゐた僅かばかりの才能を空費して了った訳だ。人生は何事をも為さぬにはあまりに長いが、何事かを為すにはあまりに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事實は才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもゐるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。」と「胸を灼かれるような」反省と悔恨が続く。「人生は」云々の antithetical な、それゆえ鮮かな警句（中島の創作であろう）は、「光と風と夢」にも数多く見られるように、彼の文体の特徴の一つであろうが、儒家の出である彼の漢文的発想法を示すものであろう。ただこの場合は、「何事かをなすにはあまりに」といった西洋的表現が、ごくかすかにだが異質的に私には感じられる。

どうでもいいことだが、「己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもゐるのだ」という中には、作家の某、学者の某、某、文芸批評家の某などがいる。女学校の同僚だった山口比男氏は「敦にあせりのあることを感じた」と書き、さらに、一高（旧制）で一年後輩の批評家の某氏が文学界賞を受けた際には「おれより才能のない男が……」と洩らしたともいっている。それより以前、昭和10年（1935）の改造当選者の湯浅氏のことは、「これは中学でいっしょだった男らしい」と私に言っただけである。焦躁を口に出すことを抑えたともとれるし、自分の才能をひそかに恃んでいたともとれる。少なくとも批評家某氏の受賞の際よりも余裕があったと言える。

さて「人虎伝」では「君還都、見吾友人妻子、慎無言今日口事」とだけであるが、「山月記」では「君が南から帰ったら、己は既に死んだと彼等に告げて貰へないだらうか。決して今日のことは明かさないうで欲しい。」とここまでは同じだが、「厚か

ましいお願いだが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らって戴けるならば、自分にとって、恩倖、之に過ぎたるは莫い」と付け加えている。

そうして、帰りにここを通るな。故人を認めずに襲いかかるかもしれないから、と注意し、君が別れて前方百歩の所にある丘に上ったら醜惡な虎になった自分の姿を見せよう、君にもう一度自分に会いに来させないためにという。別れを惜しんで哀慘は馬上の人となる。叢の中からは、また堪へられないような「悲泣の声が洩れた。」

「行數里登山嶺、兩視、則虎自林中躍出咆哮。山谷皆震。」に対し、「一行が丘の上についた時、彼等は、言はれた通りに振返って、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思ふと、又、元の叢に躍り入って、再び其の姿を見なかった。」「何と力に充ちた悲劇の結びであろう」という深田氏の感慨は、またすべての読者の感慨であろう。（「人虎伝」にはこの先まだ數行あるが、それはなくもがなの結びである。）

作家には、全く想像による型と、何か典拠による型と二つあるようである。これは創造の二つの型であって、前者を後者より優れたものと定めるわけにはゆくまい。中島はより多く前者に属すると言えそうである。「光と風と夢」、「弟子」「李陵」などの傑作は皆この型のものである。問題は、それがどのように扱われたかである。「李陵」の中の司馬遷の修史の態度はこの意味で注意すべきものである。司馬遷も、孔子のように「述而不作」という行き方であるが、単なる事件の列挙や、あまりに道徳的な断定はむしろ「作る」の部類に入る、とする。「彼は述べただけであった。しかし何と生気潑刺たる述べ方であったか？ 異常な想像的視覚をもった者でなければとうてい不能な記述であった、」と中島は言っている。その異常な想像的視覚の上に、作中人物に対する激しい共感がある。それに彼自身が乗り移ってしまっているところにその特徴がある。

昭和8年4月、私は中島に芥川をどう思うかと尋ねてみた。風貌、好尚、おそらく誰もが感じるにちがいない和漢洋に通じ博覧強記な点、その他いろいろの類似を感じたためである。ところが意外の返事がはね返ってきた。「芥川の全集を売って奈良や京都を旅行した。」私は当時はその意味がよく解らなかつた。あまり似ているところから来る嫌惡に似た感じくらいに考えていた。しかししばらくして、「早稲田大学の五十嵐力という先生が芥川の文章は拙いと書いていたよ」というと、彼は憤然として

「学者先生に何が解るか」と言った。こういう彼を何が芥川から訣別させたのであろうか。

深田久弥氏は角川文庫の解説の中で「古譚の六篇は、表面は芥川龍之介やアナトール・フランスに見るような教養の深い、細工の緻密な、文体の高雅な、気の利いた短篇に思われるかも知れない。しかし芥川龍之介やアナトール・フランスと根本的に違うところは、彼等の短篇がディレタンティッシュであるに引きかえ、君の作品には君のナマな血が通っている点である。芥川やフランスの短篇を読んでも、私はその作品の背後に立つ人物をあまり感じない。ところが「古譚」の短篇では、作中人物の言葉や動作が、そのまま中島敦の感慨であり、彼が採ったかも知れない行動である。」と書いていられるが、さすがに中島が、（一高出身の五、六年先輩という心易さもあったろうけれども）、この人には解ってもらえると信じていた氏の理解の深さを示す言葉である。

「臆病な自尊心」

最近「山月記」に関して某氏（希望によって名前は出さない）から、次のような思いがけない示唆を与えられた。「臆病な自尊心」に関するものである。それはシャーウッド・アンダスの「卵の勝利」の中の Unlighted Lamps を意識していなかったか、「臆病な自尊心」はその中から採ったものではないか？ という意見である。山本晶氏による梗概（省略）を記した後で次のように記している。

山本晶氏はこの作品について「もともと「メリー・コ克蘭」(Mary Cochran)と題して書きはじめた小説の一部である。光と闇という印象主義的なトーンが、メリーとその父の埋もれた人生と活気ある町、死に近づく魂と生れいづる命という、対照的なモチーフの基調になって、この短篇をアンダスの秀作の一つにしている。」と述べており、世の評価も大むね力点をそうしたところにおいて受けとめているのであるが、自分の注意を惹いたのは、そこではなくて、医師レスター・コ克蘭が、娘にその母との過去について打ち明けえなかった理由として、自分の心情をこう説明するところである：――

“I told myself she should have understood without words and I've all my life been telling myself the same thing about Mary. I've been a fool and a coward. I've always been silent because I've been afraid of expressing myself...

...like a blundering fool. I've been a proud man and a coward. "Tonight I'll do it. If it kills me I'll make myself talk to the girl," he said aloud, his mind coming back to the figure of his daughter.

ここで、先に引用した「山月記」の中の虎になった原因の箇所が引用してある。(重複するゆえ省略)。そして、

「くどいくらいに、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」がくりかえされている。この箇所を比較して、自分がそこに類縁性を感じるとするのは牽強なのであろうか。

「山月記」のこの部分は、李徴が虎になった原因を、彼の性情のしからしめる所だとしていることで、作品のキー・ポイントともいえるべき部分なのであるが、アンダソンの“Unlighted Lamps”においては、前記の部分は、さきほどの山村晶氏の梗概においてもほとんど無視されているのは何故であろう。自分はこの作品で光と闇とが効果的に使われているという点ももとより高く買っただけでも（そして、そのことについては Burbank なども言及しているが）、それにも増してこの作の基調となっているのは暗さだと考える。「すべて否定、徒勞、挫折、敗北、疎外、未竟、喪失、死滅」の表現をここにもみつけるものである。中島が戦争中に、ありあまる才能を持ちながら不遇に終ったその薄幸な生涯を思うと、彼をとりまいていた時代や状況の不安、疑惑、冷酷な運命の中から、アンダソンのこの小説の unlighted な暗さにいささか共感するものがあってその underdog 的な主人公の性格を感じとったのではなかったらうか。」

と書いている。この意見の学者は綿密丹念な読書家で、しかも珍らしく記憶力のよい人である。こう指摘されるまで、私は全く「山月記」とシャーウッド・アンダソンとを結びつけて考えてみたことはなかった。シャーウッド・アンダソンのこの作品は私も速読のテキストにして2時間くらいで読み了えたことはある。しかしその時にはぜんぜん気がつかなかった。

氏に指摘されてずっと考えているが、今のところ私にははっきりと、「臆病な自尊心」ということばがシャーウッド・アンダソンの作品に負っていると断定することはできない。むしろ否定的である。以下、私の考えてみたところを書く。

直接、中島から、シャーウッド・アンダソンについての意見なり、この作品への言及なりを聞いていればいいのだが、私には記憶がない。もちろん、彼自身も書いているようにきわめて「旺盛な読書力」（「無題」にある語）の持主だから、読んでいた可

能性は十分ある。「和歌でない和歌」の54人しか彼の精神に影を投げなかったと考えるのと同様、彼の作品のどこにも言及がないからと言って彼が読んでいなかったとか、いや読んで影響を受けなかったなどと考えるのは誤っている。同時に、たとえば卒業論文でいちばん多くスペースをさいているからといって、谷崎潤一郎の影響が最も多いなどと速断するのも同じように誤りである。

しかし、この「臆病な自尊心」という言葉が使われているのは、じつは、この「山月記」ばかりではない。昭和11年11月10日脱稿した「狼疾記」の中にも出てくる。

「〔学校を卒業した時〕彼は自分に可能な道として二つの生き方を考えた。一つは所謂、出世——名声地位を得ることを一生の目的として奮闘する生き方、(中略)将来の或る目的(それに到達しない中に自分は死んで了ふかもしれない)の為に、現在の一日一日の生活を犠牲にする生き方である点に、変はりはない。もう一つの方は、名声の獲得とか仕事の成就とかいふ事をまるで考へないで、一日一日の生活を、その時その時に充ち足りたものにして行かうといふ遣り方、(中略)である。

さて三造は第二の生活を選んだ。今にして思へば、之を選ばせたものは、畢竟彼の身体の弱さであつたらう。喘息と胃弱と蓄膿とにたえず苦しまされてゐる彼の身体が、自らの生命の短いであらうことを知って、第一の生き方の苦しさを忌避したのであらう。今に至るまで治りやうのない、彼の「臆病な自尊心」も亦、この途を選ばせたものの一つに違ひない。人中に出ることをひどく恥づかしがるくせに、自らを高しとする点では、けっして人後に落ちない彼の性癖が、才能の不足を他人の前にも自らの前にも曝し出すかもしれない第一の生き方を自然に拒んだのでもあらう。」

「狼疾記」のこの「臆病な自尊心」という語には、このように、括弧までついている。しばらくこの括弧を考えてみたい。どうして括弧をつけたのだろう。シャーウッド・アンダソンからの引用だとことわるためであろうか。

中島がいちばんよく引用しているのは、ロバート・ルイ・スティーヴンスンの「若い人たちのために」(Virginibus Puerisque)の中に出てくる Dolls are stuffed with sawdust and yet are excellent play-things という言葉である。日常もよく口にしたし、「光と風と夢」の中に出てくるし、未定稿の「無題」にも、そのまた下書きのような文章(「断片」25)にも出てくる。しかしスティーヴンスンその人を書いている「光と風と夢」は論外だが、ほかの場合にも「イギリスの文人のことば」などとして、少なくとも、自分のことばでないことがわかるように書かれている。

「願望ねがひはあれど希望のぞみなき」これも「狼疾記」の初めの方で「再び神曲を引くなら

ば」とダンテからであることを明らかにしている。「かめれおん日記」の終り近く、外人墓地で「周囲の墓々を見廻すと、死者達の哀しい執着が——「願望はあれど希望なき」彼等の吐息が、幾百とも知れぬ墓処の隅々から、白い霧となって立昇り、さうして立罩めているやうに思はれる」には出所はないが、コンテキストから、引用だ、あるいは引用らしい、ということはわかるであろう。あとは「スモール・ラティン・エンド・レス・グreek」というシェイクスピアを批評したベン・ジョンソンのことば、これは有名だし片仮名だから中島自身のことばでないことは、チャールズ・ラムの「オールド・ファミリー・フェイスイズ」と同様、はっきりしている。

したがって「臆病な自尊心」をそのような中に入れるとすると、「アメリカの作家シャーウッド・アンダスンの言う」などということばをつけなくて、ただ括弧をつけただけでは（その頃尾崎士郎が「卵と勝利」を褒めたからといって）まずたいい解るまい。それが証拠に、これまでそのような説を言い出した人がいないではないか。もちろん、ただ括弧でくくった語句はある。「肉体への屈服」「精神への蔑視」（昭和8年「ブウル の傍で」）「絶対の不変性」（昭和11年「かめれおん日記」）「自分を神としたい」（これは芥川の言葉）「心優しき軽蔑」「存在への疑惑」「世界とは」「人生とは」（狼疾記）といった哲学的なことばのグループに入るべきものではなかろうか。

次に、こういう詮索の順序として、シャーウッド・アンダスンのこの作品か、あるいはシャーウッド・アンダスンについて書かれた書物か、その他多少でも手がかりになりそうなものを、蔵書の中を探すことになるであろう。田鍋幸信氏が作成した「中島敦蔵書目録」によって調べてみると、シャーウッド・アンダスンの作品は、原書も翻訳も何一つない。だからといって、読まなかったなどということにはならない。というのは、不思議なことに、この蔵書目録にはアメリカ文学に関するものが、翻訳さえ（ヘンリー・ジェイムズの「デージー・ミラー」一冊を除いて）ないからである。アメリカ文学に関するものだけゴソッと欠けているように見える。これはけっしてアメリカ文学を毛嫌いしたとか問題にしていなかったとか、いうわけではない。たとえば、卒業論文で、耽美派の源はエドガー・アラン・ポウだとしているが、そのポウの作品さえない。蔵書目録の作成者もこう記している。「未亡人の言によれば、生前古書店との売買が激しく、「芥川龍之介全集」等も売却したとのことである。また死後もかなりの紛失が考えられ、ことに昭和22年の水害時、破損棄却したものが多いとの由。外に「戦争と平和」、「オー・ヘンリー全集」等もあったと伺った。」その通りであろう。たとえば、その「戦争と平和」にしても、買え、ということで、そのような形式をとり、現に私の手許にある。こういう次第でシャーウッド・アンダスンを 中島が読

んでいたかどうかは蔵書目録では判らない。かりに読んだことがあっても、印しでもしてないかぎり、そこから取ったものだとか、影響を受けたとか、言うことはできないであろう。時代や環境が暗かったといった程度の共通点で影響を受けたなどするのは、飛躍であろう。中島の好んで口にする自ら発明したオクシモロンにすぎなかったことも十分考えられる。要するに、「臆病な自尊心」が中島の言葉であるのか、シャーウッド・アンダソンの言葉か、そうだとしてこれを意識的に使ったのか、意識の下に在ったものか、私にはわからない。

なお「微妙な点において」という表現は、芥川龍之介「文芸的な余りに文芸的な」の中の鷗外に対する感想文の中に数回出てくること、「(己の内なる臆病な自尊心を)飼いふとらせる結果になった」ということばは森鷗外の「ヴィタ・セクシュアリス」の中に出てくること、などという氏の指摘もあった。紙数の関係もあって紹介だけに止めるが、中島がそれらの作品を読んでいたことはもとより明らかなことであるが、はたして意識的にこれらの表現を用いたのか、識閥下にあったものか、そんなこととは無関係に彼の言葉であるのか、「臆病な自尊心」同様、私には決定いたしかねる。